

Emily Brontë の研究

— その信仰 —

(Charlotte Brontë, George Eliot と比較して)

宮 川 下 枝

ふとした出逢いから Emily Brontë を研究するようになり、ある時は同じ Theme を姉 Charlotte との比較において考えてみたり、又 Emily 独自を扱ってみたり随分長い間エミリーと付合ってきたが、今回はその信仰について考えてみたい。

信仰という問題が identification 神と自分との一体の自覚の問題であるとするならば “I am Heathcliff” とネリーに訴えた Cathy の絶叫は、ひいては Emily 自体の告白であり、ヒースクリフの中に神を見出していたとさえ考えられる場合もある程で彼女の神は一種異った神であったとも云われている。だが死を恐れなかった点に於いて、又、死を超えた次元に於いて結ばれる愛を信じた点に於いて彼女の信仰は非常に純粹なものであると思うのであるが、このエミリーの信仰を考えるにあたって、姉 Charlotte の信仰とを合わせ考えてみることは面白いことだろうと思う。

当初 “月” の問題を作品の中に探った時も姉妹の作品を合せ考え pair として扱ってみたが今回も二人を比較しながら研究してみたいと思う。もう一つ慾張って同じ19世紀の女流作家 George Eliot をも含めてみたら更に興味深いものになるだろうと思ひ、そのような試みをすることにした。

英国北部 Yorkshire の Haworth の片田舎に牧師の娘として育ち日々を教会牧師館の中に過し、教会墓地を眺めながら毎日を送った Brontë 姉妹が何等かの意味で宗教の影響を受けるのは当然のことであり、又当時は社会的にも英国国教の確立していた19世紀の中のことである。

そして彼女等は伝統的な英国国教会に属していた。では姉 Charlotte の場合から考へてゆくことにしよう。

(1) Charlotte Brontë の場合

An important element in Charlotte Brontë's religious philosophy,

consistent with attachment to the Church of England, but not necessarily indicating any marked degree of orthodoxy, was her hatred of hypocrisy. (2)

(*Bronte's Religion* p48)

とある通りシャーロットの信仰には伝統的な英国国教会に属する要素がありこれは重要なものであるが偽善を嫌う彼女にとって完全に正統派的な信仰であるとも云えぬところもある。

教会の出て来る場面を考えてみよう。一番印象的である Jane と Rochester の結婚式の場を取り上げよう。話の筋合いからも又シャーロットの作品の特長の一つでもある18世紀趣味の Gothic 的な怪奇性の名残りで種々の場面に見られる Grotesque な風景の一場面とも考えられる箇所である。箇所で宗教的雰囲気とは程遠い処かも知れない。読者に気をもませ続けたロッチェスターとジェーンの結婚がいよいよ成立かと安堵させ乍ら又逆転するとも云う Climax でもある処である。

We entered the quiet and humble temple; the priest waited in his white surplice at the lowly altar, the clerk beside him. All was still: two shadows only moved in a remote corner. (*Jane Eyre Chapter 26*)

(わたしたちは、ひっそりした質素な教会堂に入った。牧師は白い法衣をまとってひくいて祭壇のところで待っており、そばには書記が控えていた。あたりは静まりかえっていた。向うのすみで二つの影が動いているだけだった。)

祭壇の側にお墓のある寺院の中である。ロッチェスター家の祖先が葬られ墓の側に天使の像が彫刻されて召された霊を守っている。

ロンドンのウエストミンスター寺院をはじめ沢山の教会堂の内部にある墓の数には全く驚かされるものである。

.....where a kneeling angel guarded the remains of Damber de Rochester, slain at Marston Moor in the time of the civil wars, and of Elizabeth, his wife. (ibid)

Our place was taken at the communion rails.....He paused as the custom is. When is the pause after that sentence ever broken by reply? Not, perhaps, once in a hundred years. And the clergyman, who had not lifted his eyes from his book... his lips unclosed to ask, "Wilt thou have this woman for thy wife?" when a distinct and near voice said-

"The marriage cannot go on:..." (ibid)

二人は聖餐台前の欄の前に立つ。牧師が二人の誓言の言葉を讀もうとする、何百年來この静寂が誰かの答えによって乱されたことはないのに、まさに牧師が口を開いて「汝この婦人を妻としてめとるや?」ときこうとした瞬間、

“The marriage cannot go on.”

その結婚まかりならぬと待ったがかかるのである。息を詰まらせるような瞬間のその場の描写はうす気味悪く寒気をもよおすものである。彼には既に妻のあることが言明され非常に打撃を受ける場面でもある。

だが別の箇所には教会のベルが美しく鳴りひびくところもあるのでそこを拾ってみよう。

ジェーンが郵便物を出しに冬の Hay への道を急ぐところだが美しい描写である。

The ground was hard, the air was still, my road was lonely:....

It was three o'clock: the church bell tolled as I passed under the belfry—the charm of the hour lay in its approaching dimness, in the low-gliding and pale-beaming sun. I was a mile from Thornfield, in a lane noted for wild roses in summer, for nuts and blackberries in hips and haws, but whose best winter delight lay in its utter solitude and reafless repose.

(Chapter 12)

教会の鐘の音があたりに溶けこんでいる。ロッチエスターとの出逢の場でもある。花の描写も入念で美しい。

では彼女の信仰の本質に入ってみよう。

There are thus two strands in Charlotte's position which are vital. She has a strong attachment to virtue which results in a wish to see the wicked suffer and the righteous prosper, but fighting against this feeling she has a strong reluctance to lay down strict rules for salvation and feels hostile to those who do. (3)

と Tom. Winnifrith がその書に於いて述べている如く、シャーロットは悪人は滅び善人は栄えるべきであるとの道徳的考えは好きであったがそれを固執しようとはしなかったし、又そうした厳しい考えを持つ人に対しても好意は持てなかった。

又 Roman Catholicism では救いという問題に対して厳しい階級的差別をつけているのでそれには反発を感じていた。

Roman Catholicism lays down strict rules for salvation, but these rules appear to have no connection with morality; for this reason, although Charlotte is not prepared to dismiss all Roman Catholics as bad, she says that Roman Catholicism beats Methodism, Dissenterism, Quakerism for folly.”(4)

又同氏によれば、シャーロットは、苦しみと自己犠牲とが来世の救いをもたらすという信仰を持つことが出来なかつたと書かれている。彼女自身が来世の救いの問題を信じる事が出来なくて、死に対しても不安を抱いたということである。その点、死を恐れずに落着いて自分自身の死に直面した妹エミリーの方がしっかりした信仰を持っていたと云えるかも知れないが、*Jane Eyre* の中に出て来る Jane 自身の信仰は如何なものであろうか、これは英文学研究一号に於いてもその点に触れたところがあるのでもう一度引用してみたい。

『彼女の決心を助けるものは月というより、空にあらわれた彼女の母の霊であった。精神的なものの総べて一生命の根源ともなるべき愛、今や確実に損んだ愛情をふりきるためには、幾倍もの勇気のいることであつた。それでもなお彼女はそれを断行しようとする。

信仰的な迄の愛情ではあるが Jane は更にそれにもまさる信仰というものを持っていた。正しいと信ずることのためには、断固として何物をも辞せぬ強い態度、自分自身に甘えようとしぬ強さ、人間的な弱さに抵抗しようとする毅然たる態度が彼女のものであつた。

決断した彼女は夜中のうちに、真暗やみの中を僅かのをまとめて愛する Rochester のもとを去つてゆく。「彼に重婚の罪を犯させてはならない。』

神への絶体の服従の姿が見られる。神の声というより自分の内なる声と云うべきであるかも知れないが、その声に耳を傾け、必死のロッチエスターの願も退けて自己との闘いにも打ち勝つあたり毅然としたものがうかがえる。この信仰的態度は次の文にはっきりうかがうことが出来る。

The more solitary, the more friendless, the more unsustained, I am, the more I will respect myself. I will keep the law given by God, sanctioned by man.

(Chapter 27)

「私は神に写えられた掟を守り通す。」と断言するところに彼女の信仰のはっきりした

態度がうかがえる。

Laws and principles are not for the times when there is no temptation. (Chapter 27)

世間なみの幸福が得たいという誘惑にかられる時こそ神の掟は守らなければならぬと彼女は断言する。

こうした決意をもってロッチエスターのもとを去ったジェーンであるだけにその後の多くの労苦の年月のあとロッチエスターに出逢うことの出来た彼女のよろこびは大きい。彼女の素直なよろこびの声に耳を傾けてみたい。

“She is all here: her heart too. God bless you, sir! I am glad to be so near you again.” (Chapter 37)

神への感謝の気持もはっきり現われている。神の声に従った者の歓びでもあろう。

Why then did she not state more vigorously that suffering and self-sacrifice brought salvation in the next world? (5)

と Winnifrith は訝るのであるが、苦しみと自己犠牲は将来の自分の幸福を約束すると考えるのが、ジャーロットの考え方であろう。たしかに彼女の *Jane Eyre* に於いては、観善懲悪のものにはならず19世紀の多くの読者が期待したものにはならなかったかも知れないが確立した信仰はうかがえるのである。

では、このブロンテ姉妹とは環境を異にし牧師の家庭には育たなかったが、信仰深い家庭の中に成長し、途中での変動はあり乍らも、最後迄その信仰が作品の基調となった George Eliot の場合を考えてみたい。

(2) George Eliot の場合

彼女は Warwickshire の片田舎に生れ、その少女時代をメソジスト派の中に過した。後に至って思想家 Charles Bay の影響を受けて、幼児からの信仰が動搖し始めたにも抱らず結局その信仰は幾分道徳的になり乍らも最後迄その作品の基調となった。(6)

また豊田博士が「女史の心の奥の情緒は理智の飛躍に伴いかねた。かくて女史は当時の教会に対して皮肉な諷刺を沿びせ乍らも田舎の人の純朴な信仰に対しては温い同情を示している」と云われている通り実に明るく楽しい筆致で教会風景、村人の信仰を扱っている。この場合彼女の作品 *Silas Marner* を例にとって考えてみたい。

(A) 村人たちの信仰。

「*Silas Marner* は産業革命にまだ毒されぬ昔ながらの美しい田舎生活を描き題材をその幻想の追想の中に求めたものである⁽⁸⁾」とも「抽象的なキリスト教的な人間学の観念がまず最初に作者の頭の中にあり、それを小説の形式に具体化したいわゆる *moral fable* である⁽⁹⁾」と考える人もある。

又この小説を黄金が金髪少女に変るといふ如何にも *fantastic* なおとぎ話と解する人もあるが、村人の単純な信仰に対する彼女の同情は同時に彼女の捨てきることの出来ない信仰的態度であり、特に *Silas Marner* を支える一つの *theme* であり、又生命であるとも考えるのである。

It was an important-looking village, with a fine old church and large churchyard in the heart of it. (*Silas Marner* Chapter I)

美しい古い教会、それに隣接する墓地を中心とする Raveloe 村の描写から始っているこの小説の中に登場する主人公サイラスは今では年老いた織工であるが、その昔この村に移り住む前の Lantern Yard に於いては、一人の熱心な教会員である青年であったのに裏切られた上恋人迄奪われて

"I was sore stricken. I can say nothing. God will clear me."

(*ibid*)

と叫んでその村を去って又その信仰を捨てたのであった。

Poor Silas went out with that despair in his soul that shaken trust in God and men. (*ibid*)

人を信ずることなく孤独の中に織工として過したサイラスに更にふりかかった一つの事件は今では唯一の楽しみに代った金貨への喜び迄奪われるという事件であった。地主の息子で何不自由なく暮す身であり乍ら、金に困ってサイラスの大切にしている金貨を盗みに入るその仕業による。

The sight of the empty hole made his heart leap violently.

(Chapter V)

この驚き絶望の果て何とか盗人を捕えて欲しいとの一途な願いから、彼は訪れたこともない村の居酒屋 Rainbow に行き始めてそこに居る人達になんとか助けて下さいと頼むに至る。始めは噂していた人の幽霊でも現れたのかと驚いた村人達も彼の事情に同情し、ここにサイラスと村人達とのあたたかい交流が始まるわけである。これから

の村人達の彼えのやさしい態度、教会の風景等エリオットは細い touch で描いているのでそれ等を二、三拾ってみよう。

The inhabitants of Raveloe were not severely regular in their church going. (Chapter X)

この人達は規則正しく教会に行くような人達ではなかったが、それでもクリスマスには、村中集って主の降誕のお祝はしていた。

ここに一人の心やさしい夫人が現われる。この婦人は物語の構成上からも必要な人物となるが、信仰を持った村人の代表者としてよく描かれている。

This good wholesome woman could hardly fail to have her mind drawn strongly towards Silas Marner. (ibid)

彼女は日曜日、ケーキを持ち息子 Earon を連れて彼のもとに来る。持参したケーキの上を書いてある字は何の意味か忘れてしまったが教会で教えて貰ったよい字であるからというあたり純朴で素直な信仰を示している。字が読めるサイラスにはそれが I.H.S. (イエス類の救主) の意味であることが分り Winthrop さんを驚かせる。

“But you didn't hear the church bells this morning?” (ibid)

日曜日は教会のベルがきこえないのですかとの彼女の更なるおどろき。日曜日は仕事を止めて教会にいらっしやい、という親切な彼女のすすめを受ける。

“But what a pity it is you should work of a Sunday, and not clean yourself--if you didn't go to church; for if you'd roasting bit, it might be as you couldnt leave it, being a lone man.;.....if you was to go to church, you'd be a deal the better. (ibid)

やさしい彼女の申し出と親切を感謝こそすれ、その一方的なおせっかいを恨みもしなかったが流石彼は一人になると安堵する

he couldn't help feeling relieved when she was gone-- relieved that he might weave again and moan at his ease. (ibid)

最後に Earon にクリスマスキャロルの歌をうたわせて

God rest you merry gentlemen,

Let nothing you dismay.

For Jesus Christ our Saviour

Was born on Christmas Day.

(ibid)

そして彼女は、

"It's never too late."

(ibid)

と新しくやり直すことをすすめて去ってゆく、

there was no word in it that could rouse a memory of what he had known as religion.

別に彼女の言葉が忘れていた信仰を思い出させるものではなかったが、

Thank you--thank you kindly.

と彼女の親切には心から感謝する。そして又ここにエリオット独自の哲学的見解がある。

The foundation of human love and of faith in a divine love had not yet been unlocked and his soul was still the shrunken ribulet. (ibid)

信仰に目覚めることのむづかしさをエリオットも心得えている。

その彼を本当に教会に行かせるようになったのが Eppie の出現だろう。

金を盗まれた後、サイラスは又仕事のみで没頭して働いている。夕方彼が例の発作をおこして暫時気を失っている間にあかりを頼りに這い込んで来たのが Eppie であり、自後この赤ん坊を育てる処から彼ははじめて人間への愛情を覚え、やがては教会に結び付けられるようになる。

彼は金髪のこの少女を金貨の化身と考え、与えられた新しい生命を育てることに全力投球をするうちに少女のサイラスに対する深い愛慕の念が彼を支えていく、物語にはその後幾多の紆余曲折があるにしても教会に出席するようになったサイラス、今は立派に成長した Eppie 二人共々に教会に出席し礼拝を終って出て来る場面があるのでのぞいてみよう。このように和やかな教会の風景は Brontë 姉妹の作品には見受けることは出来ない。

It was a bright autumn Sunday, sixteen years after Silas Marner had found his new treasure on the hearth. The bells of the old Raveloe church were ringing the cheerful peal which told that the morning service was ended; and out of the arched doorway in the tower came slowly, retarded by friendly greetings, and questions, the richer parishioners who had chosen this bright Sunday morning as eligible for church-going. It was the rural fashion of that time for the more important members of the congregation to depart first, while their humbler neighbours waited and looked on, stroking their bent heads or dropping their curtesies to any large rate-payer who turned to notice them. (Chapter X V I)

サイラスがエビーを育ててから既に16年の月日が経過している。エビーは立派な娘に育ちサイラスは娘と教会に出席するようになっていく。ラベロー村の古い教会の鐘は朗らかに鳴りわたり、礼拝が終ったことを知らせている。礼拝を終って出て来る人々は、先づ富める教区民達で日曜日の朝のお天気のよい日なら教会に行く方がいいと考えた人達で習慣上、この村の主だった人達は先に出て来る。そしてその人達の退出を待って続いて出て来る一般会衆たちが丁寧におじぎをすれば頭を撫でてやる。階級の差はあっても、教会前にくり上げられる和やかな風景である。

これは私も英国を旅行中に接した日曜日の実に和やかな風景であった。ロンドンでは街はずれの教会前を丁度12時頃通過した時礼拝を終った牧師と信者達が外庭で楽しげに挨拶をし話している姿が見受けられ、又次の日曜日は Wordsworth の生家のある湖水地方の Keswick であったが聖書讚美歌を手につつましやかな服装で一家揃って教会に行く姿は実に敬慶で心打たれるものであった。

では彼女の信仰の本質に入ってみよう。

Silas Marner の中に現れる信仰を次のような三つの観点から説いてみたら一つの課題も解決出来るのではないかと思うのである。即ち

この小説に投げかけられた大きな問題である、あのサイラスが絶叫した “God clear me!” 神が私の無罪を証明して下さいとの彼の願い祈りは、きかれたかどうかとの問いに対する解答も出て来ると思うのである。サイラス、マーナーを最後迄読んでみても年老いた彼が昔の街 Lantern Yard に行ってみても昔を知る人は既になく彼の無実を証明してくれる人もいない。では次の三つを次々にあたってみよう。

(1) 出 合 い

キリスト教の中で教えられている一つの大きな要素が出合いの信仰であるとしたらエリオットはまさにこの重要点をついている。

人を生れ変らせるものは物質ではない、即ちイエスとの出会いこそが人間の変革であるとの信仰、この考えがああクリスマスの晩の Eppie の出現として表明される。何か自分の無罪を証明してくれるのを待つような他力的なことよりもサイラスの人間自身の変革が必要だったのである。

The thought of the money he would get by his actual work could bring no joy, for its meagre image was crushed by the sudden blow, for his imagination to dwell on the growth of a new hoard from that small beginning.

(Chapter X)

いやされることのなかった彼の悲しみも

the fingers lost their tension, the arms unbent; then the little head fell away from the bosom, and the blue eyes opened wide on the cold starlight. (Chapter XII)

But where was Silas Marner while this strange visitor had come to his hearth? He was in the cottage, but he did not see the child. (ibid)

彼の気付かぬ間に彼のいろりばたに這寄って来た幼子の無邪気さに心ひかれる。
“was it a dream?” 夢からしと疑うあたりのエリオットの描写も実にうまい。村人の親切な手伝いもあってマーナーはこの雪の日におくりこまれた贈りものを育てることにする。

Marner took her on his lap, trembling with an emotion mysterious to himself, at something unknown dawning on his life. Thought and feeling were so confused within him, that if he had tried to give them utterance, he could only have said that the child was come instead of the gold--that the gold had turned into the child. (Chapter XIV)

“But she'll be my little un,” said Marner, rather hastily. She'll be nobody else's.” “We called her Eppie,” said Silas. (ibid)

こうした過程のうちに物から人間の愛への転身それによる人間の変革が取り扱われている。

(2) 赦 し

これは Silas が自分の金が盗まれたことを知ったあとの彼のとった態度であるがその事件を知った時の彼の半信半疑の状態、漸く盗まれたと理解出来てからの心の動揺、そして盗まれたとしたら誰かに助けを求めに行かねばならないと徐々に決心するあたり迄のエリオット独特のうまい心理描写があるのであるが、意を決して始めて村人の集る居酒屋に姿を表わす処がある。この居酒屋に集る人々の会話は有名な章とされているが、さてそこに突然現われたサイラスは Jim Rodney を掴えて、いきなりお前さんが取ったのなら返えしてくれ等と迫り人々を呆れかえらせる。始には噂をしていたサイラスの幻霊が現われたのではないかと驚いた人々も事情が分ると彼に同情して、その夜のロッドニーのアリバイを証明してきかせる。彼は素直に皆の前で

“I'll not accuse you. I'll not accuse anybody.” (Chapter VII)

と云うのであるがこのサイラスの言葉こそはこの物語りの縦糸となるものであり、エ

リオットの中に残っていた福音主義信仰の赦しの信仰である。

「私は誰も咎めはしない」の態度は一貫したサイラスの態度であって、Lantern Yard に於いても Raveloe 村に於いても、自分にぬれ衣を着せた人を徹底的に探し出して処罰しようとか、又この自分の大切に貯えた金貨を盗んだ人を見付け出して処罰しようかとの考えはない。これは聖書の中に見られるイエスの態度と全く同じである。姦淫の女をイエスの下に連れ来たつたパリサイ人学者等はイエスがどのような態度に出られるかを見守った。静かに地面に字を書いていられた彼は答を迫る人々に「汝らのうち罪なきもの女に石を打て」と仰っしゃった為、パリサイ人等は一人石を捨て二人石を捨て遂に皆去ってしまった。イエスと女だけになった時、彼の云われた言葉が「私も汝を罰しない。」 “Neither do I condemn thee.” で、

“I'll not accuse you. I'll not accuse anybody.” (ibid)

全くサイラスの口をついて出た言葉と同じではないか。この赦しの思想を理解出来てこそ何かしら尻切れとんぼの様に思われるこの物語り、God clear me の絶叫もきかれないままに終るかに見えるこの物語にもはっきりした解答のあることを理解出来ると思うのである。

(3) 神の意志

“Well, yes, Master Marner.” said Dolly, who sat with a placid listening face, now bordered by grey hairs; “I doubt it may. It's the will o' Them above as a many things should be dark to us; but there's some things as I've never felt i' the dark about, and they're mostly what comes i' the day's work. You were hard done by that once, Master Marner, and it seems as you'll never know the rights of it, but that doesn't hinder there being a rights, Master Marner, for all it's dark to you and me.” (Chapter XX)

更にエリオットの信仰に基く思想を延長させてゆけば、証しを立てるとか、人を赦すとかそんなことは人間が努力し骨折ってすることではないのである。人間は自分に与えられた事を真剣に果せばあとは神の御手にゆだねればよい。これはエリオットがドリーの口を通して語っている言葉であり、人間のなすことではない。すべては神にゆだねればよい。あらゆることは神の深い御意志によるものであるとの信仰こそが、

“God clear me.” の言葉に対する解答であり、成長して美しくなった Eppie を連れてランタンヤードを訪れたサイラスが見たものは、産業改革の為工場へ工場へと流

れゆく人の波であり、変りゆく街の姿であり、彼の無罪を証明する人もなく、彼を裏切った昔の真友 Williams 又彼を捨てた昔の恋人にも逢えぬままにラベロー村に戻って来るのであるが、心安らかに帰って来ることの出来たことに対して私共を納得させる理由である。そしてサイラスは自分の心の支えとなってくれるエビイに助けられて第二の故郷に戻って来る。

以上の如く偏狭な人間から寛大な人間へと変身して行ったサイラスという一個の人物を描く過程の中に前述したようにエリオットの中に残っている深い信仰的態度を見出すことが出来ると思うのである。

この19世紀という時代はナポレオン戦争を対岸に見つつ、英国内は繁栄し英国国教の確立していた時代であって福音主義の信仰の根を下ろしていた時であるからエリオットのように理智の面では神に対する信仰に種々の疑問を持ち乍らも自分自身の根底に流れる信仰を捨てきれなかったことも、又シャーロットが時代の影響を受けると共に牧師の娘であった立場上、神の意志に従うという強い信仰的態度をその作品の中に現していることも当然のことである。がずっと変った神の観念を持った Emily の信仰を作品の中に探ってみることは更に興味深い問題であるのに、エリオットに思わず力が入ってしまって肝じんのエミリーを論ずる余白はなくなってしまった。エミリー、ブロンテの研究と題してこの研究が、シャーロット、ブロンテ、ジョージ、エリオットだけに終わってしまったのは羊頭を掲げて狗肉を売るの観なきにしもあらずで少々照れくさい次第であるが、すっかり路肩を滑り落ちてしまった車を次回はもう一度路上に戻して今度はゆっくりじっくりとエミリーの信仰、エミリーの神について論じたいと思うのである。

- (1) 研究社英文学叢書 「嵐ヶ丘」序文 豊田 実 博士
- (2) The Brontës and Their Background
Tom Winnifrith Macmillan
- (3) 全 上
- (4) 全 上
- (5) 全 上
- (6) 英米文学辞典 南 雲 堂
- (7) Silas Marner 序文 豊田博士
- (8) 英米文学辞典 南 雲 堂
- (9) サイラス、マーナー 土井 治 岩波文庫
- (10) Text: Jane Eyre Charlotte Brontë
Everyman's Library
Silas Marner George Eliot
研 究 社